



わたし ^{かいせつしゃ} 私がプラネタリウム解説者になったいきさつ

小学校3年生だった私は、星に^{きょうみ}興味を持ち始めていました。買ってもらった^{ずかん}図鑑にプラネタリウムというものが載^のっていて、星座^{せいざ}のことを教えてくれるというので、見たいなあと考えていました。1966年6月、九州から^{おじ}叔父が上京し、どこかへ^つ連れて行ってくれる事になり、それならプラネタリウムへとリクエストした結果^{けっか}、叔父、父、私、妹の4名で^{しぶや}渋谷の五島プラネタリウムを見に行くことになりました。蒸し暑い雨の日でした。



あの時の機械はいまでも^{てんとひん}展示品として残^{のこ}っています。^{しんやぐぶんかしせう}渋谷区文化施設大和田にて。

^{きやくせき}客席に着いて、^{てんじょう}天井を見上げると、^{あまも}雨漏り^{もよう}模様が随所に見られ、どうしてここに星座^{せいざ}が^{あらわ}現れるのだろうか？不思議で仕方ありません。星が^{うつ}映し出されて初めて、「これは真ん中の^{きかい}機械が映しているのだ」ということを理解^{りかい}したのでした。しかし、その星空は、これまで見たどの星空より美しくリアルに感じられ、大感激したのを覚えています。矢印^{やじるし}ポインターを使^{かいせつ}っての解説を食い入るように聞きました。子ども心に、解説者の知識の豊富^{ちしき ほうふ}さにも感心しました。解説者は^{やさ}優しい声の男の人で、名前は分かりませんが、かすかな^{きおく たど}記憶を辿ると、有名な^{おおたにとよかず}大谷豊和さんではなかったかと思われま

す。天文少年になった生意気な私は、「プラネタリウムは人工の星でまがい物だ」などと思うようになり、中学高校と足を運ぶことはほとんどありません。それが、今ではプラネタリウムの仕事をしているのですから人生不思議なものです。それには、もう1つ2つのいきさつがあります。